

# 能動的「造形表現」を目指すための考察

原井輝明

(宇部フロンティア大学短期大学部保育学科)

Consideration for aiming for active “Formative expression”

Teruaki Harai

(Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

本学では「造形表現」はⅠ～Ⅳと入学から卒業まで通して行われおり、造形活動を通して子ども達の感性を育て・表現することを手助けする技術を学ぶ科目である。1年では基礎的なものを中心に、2年では応用させたものを中心に授業を展開している。これまでの授業を振り返り、一連の授業として成果がみられる意義ある授業としてより効果的に機能させ、今後に発展させることを目的とする。また、近年、保育者になるという自己効力感が低い学生も増えるなか、造形表現科目がモチベーションにつながるきっかけにならないか、評価の低い学生の事例から考察してみる。

**キーワード：**保育、造形表現、保育者養成、少子化、モチベーション

## 1. はじめに

少子化の問題は語り尽くされていることではあるが、内閣府の統計<sup>1)</sup>によると、年間の出生数は、第1次ベビーブーム期には約270万人、第2次ベビーブーム期には約210万人であったが、1975（昭和50）年に200万人を割り込み、それ以降、毎年減少し続けた。1984（昭和59）年には150万人を割り込み、1991（平成3）年以降は増加と減少を繰り返しながら、緩やかな減少傾向となっている。2013（平成25）年の出生数は、102万9,816人と減少し続けている。18歳人口と進学率の推移をみると、平成26年時点で118万人の18歳人口に対し、大学の進学率51.5%で短大5.2%と合わせると56.7%、高専・専門学校を含めた進学率は80.0%までに達しているなか、大学と短大の収容力は93%と選ばなければ誰でも入学できる全入学時代の現状が数字から見て取ることができる。

少子化の影響で、地方短期大学の学生数の確保が困難な大学があるなか、さほど志が高くない学生も受け入れなくてはならない現状があり、入学してくる学生

の中には、遅刻・欠席の多さ、提出物の遅れ、再提出、事後指導など、学習意欲の低い学生もおり、指導に手の掛かる学生が年々増えている状態が見られる。

そう云ったなかでより効果的な学習、学習意欲の向上につながる可能性のある科目として「造形表現」の授業を見つめ直す必要がある。

## 2. 対象とする課題及び内容

### 2-1. 対象とする課題

担当している「造形表現」は保育表現技術の一つであり、Ⅰ～Ⅳと入学から卒業までを通し造形を学ぶ科目であるが、Ⅰ・Ⅱは必修科目であり、Ⅲ・Ⅳに関しては選択となっている科目である。そのなかから、Ⅰで取り組んだ「さまざまな絵画表現技法」、Ⅱで取り組んだ「陶芸と版画」、Ⅲで取り組んだ「新聞テント」、Ⅳで取り組んだ「ポリ袋のバルーン制作」を取り上げ、考察し今後を活かしたいと思う。

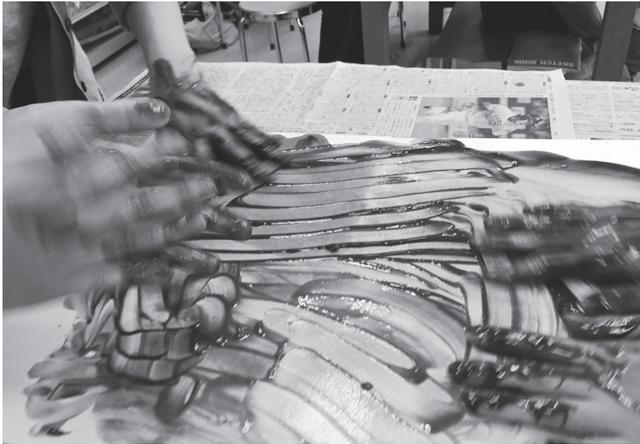


図1 フィンガーペインティングで触感を楽しむ

## 2-2. さまざまな絵画表現技法

絵画における幼児の発達の変遷は、物が持てる様になる1歳の頃からはじまり、最初は紙にたたきつけるような点や短い線のなぐり描き、徐々に手のコントロールができるようになると円や線、三角を組み合わせて描いたものに名前をつけ、意味を持たせようとしてくる。さらに、5歳頃から人や家、樹木、花、動物、太陽、雲など図式的に表す子ども独特の表現をするようになり、大人には真似できない魅力的な絵を描くようになる。しかし、絵画表現の魅力はこの様な線描きに限られたものではなく、色彩、材料、描き方、など様々な楽しみ方がある。そこで保育者が子どもと関わる際のきっかけとして、絵画表現技法を取り入れることによって、子どもが興味を広げ造形あそびに取り組むことによって、様々な色彩や素材に触れ、視覚だけでなく色や形や質感、触覚にいたるまで感性の発達に幅を持たせることにつながっていくと考える。絵画表現技法は子どもの造形感覚の幅を広げるために大切な手段である。

本授業では、90分の授業前半で2・3つの技法を紹介し、それぞれの技法が行えるコーナーを設け、後半は各自が全ての技法を制作するという方法をとっている。技法は子ども達でも可能な2・3の簡単な工程<sup>2)</sup>でできるものがほとんどで、学生達は造形あそびを体験しながら楽しんで制作している。できた作品は乾燥棚に保管し、次の授業始めにスケッチブックに張り込みキャプションをつけ、その都度整理をするようにしている。技法の授業が全て終わった時には一冊の技法ポートフォリオとして活用できる。

<技法例><sup>3)</sup>

スクラッチ(ひっかき絵)、にじみ、ローリング(ビー玉、

紐、ローラー)、ドリッピング(吹き絵、流し絵)、パチック(はじき絵)、ウォッシング(洗い出し)、マースキング、デカルコマニー(合わせ絵)、フロッタージュ(こすり出し)、マーブリング(墨流し絵)、スタンピング(型押し)、フィンガーペインティング、コラージュ(貼り付け)、ユニット。

初回と最終回を以外の各回の授業進行は、以下時間配分で進めている。

時間配分(長さ分)	授業展開
0～10分(10)	作品整理
10～30分(20)	本日の技法説明
30～75分(45)	演習
75～85分(10)	片付け
85～90分(5)	(時間があればクロッキー)

絵画表現技法の評価内容は以下の通りである<sup>4)</sup>。

### [1] 技法の定義と理解

技法の定義と作品が一致するよう、正しく素材が使用できているかどうかを評価する。

### [2] 図柄と配色の工夫

子どもとの活動を想定し、明るく楽しい気持ちになるような絵や形、色相の組み合わせかどうかを評価する。

### [3] スケッチブックへの整理

技法ごとにわかりやすくまとめられ、バランス良く作品とキャプションがきれいに配置され、丁寧に糊付けされているか、技法作品は全て揃っているか、キャプションがつけられているかどうかを評価する。

## 2-3. 陶芸と版画

ものづくりにおいて、コツコツと地道な作業の積み重ねの結果生まれる、制作物の力強さ・迫力・魅力など見る人を魅き付ける感覚がある。そのための手順や材料の性質・扱い方など理解していないと作品を作り上げることはできない。作品が仕上がるまでの工程を理解し、材料・道具を準備し、計画立てを進めていくことは、根気がなくては成果物を得ることができない。この根気強さ・粘り強さは制作面においても、保育者として子どもと関わっていく面においても必要な資質であると考えられる。

何でもインスタントにできてしまう、あるいは手に

入ってしまう現代において、手間を掛けて物をつくる経験は、極端に減ってきている様に思われる。それはパソコンやタブレット端末・スマートフォンの普及や100円ショップの出現など生活の変化が関係していると思わざるを得ない。また、造形教育に求められる教科の内容が時代で揺れ動き教育の変化が関係しているのかもしれないが、陶芸の経験をしたことがない学生がほとんどである。いずれにせよ、表現技術を考えるときに根気強さと手順は避けて通れない要素として捉え、本授業では陶芸と版画を取り入れている。

### 2-3-1. 陶芸

子どもの造形制作においてねんど造形の材料を考える際、「土ねんどほど、可塑性が高い素材はほかにはない。水分量によって、硬さが大きく変化する。水分が蒸発すれば硬くなり、水を加えれば柔らかくなる。また、火で焼くことによって、丈夫にすることができる。逆に焼かない限り何度でも作り直すことができる。土ねんどには、陶芸用や彫塑用がある。幼児が使用する場合は、粘性（粘り気）が高く安価な彫塑用のねんどが望ましい。また素焼き用テラコッタねんども使いやすい。」<sup>5)</sup>このような性質も踏まえ、授業での陶芸経験をそのまま子ども達の造形制作に応用することが可能である。

本授業では、土練り、成型、仕上げ、乾燥、素焼き、施釉、本焼き、窯出しの工程を前半の5週は4種類の基本的な成型方法（紐づくり、たたら作り、くり抜き、玉づくり）と自由な方法、計5種類の方法で成型する取り組みを行い、本焼きまで制作する作品を一つだけ選び、窯入れをする。6週目に素焼きの作品に釉薬掛けを施し、7週目に本焼きを終えた作品の窯出しを行い、まとめレポートを作成し、振り返った。

授業回	授業内容
1回目	ガイダンス：陶芸作品ができるまで 土練り（土に親しむ）
2回目	成型（紐づくり）
3回目	成型（たたら作り）
4回目	成型（くり抜き、玉づくり）
5回目	成型（本焼き作品制作）
6回目	素焼き窯出し、施釉、本焼き窯入れ
7回目	本焼き窯出し、まとめ

陶芸の評価方法は以下の通りである。

- [1] 材料や手順（工程）の理解  
材料の特性や作業の工程が理解できているか試験で評価する。
- [2] 制作方法や道具の理解  
目的にあった制作方法で作品ができているか、道具が正しく使えているかを評価する。
- [3] 造形物の工夫  
子どもとの活動を想定し、明るく楽しい気持ちになるような形や模様、色相の組み合わせかどうかを評価する。
- [4] まとめレポート  
取り組んだ成型方法の名称と工夫した点のコメントに写真を添えた記録がきちんと取れているかどうかを評価する。

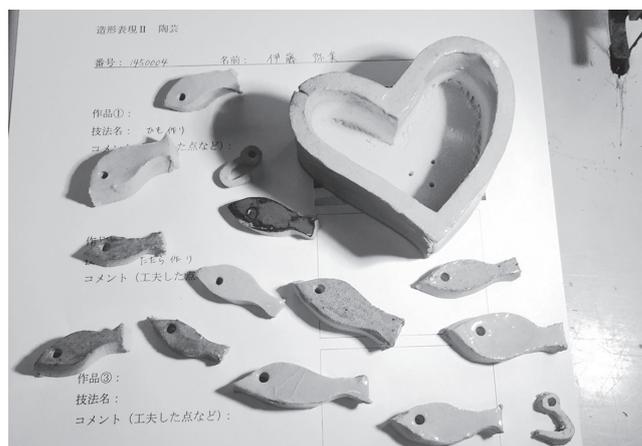


図2 たたら作りによる作品（学生作品）

### 2-3-2. 版画

子ども達にとって写し取るあそびは興味を引くあそびの一つではないだろうか。年齢に応じて様々な応用をさせることができる版画の手段は広がりがあり造形あそびに適していると言える。野菜を切った断面に絵の具を付け転写する野菜スタンプ。弾力性のある絵画用ローラーで硬い凸凹素材に押し当て、凸凹の跡の付いたローラーに絵の具を浸け、簡単に帯状に繰り返し模様として描けるのも版画の応用である。またスチレン版画やコラージュ版画は子ども達も容易にできる本格的な版画である。

学生らが授業で取り組む版画制作に於いては、ある程、時間を掛けて制作する紙版画に取り組むことで版画の原理を理解したのち、簡単にできるスチレン版画の2種類取り組んだ。紙版画は紙を切って貼るだけで



図3 紙版画制作（刷り）

版はできるのだが、学生は出っ張ったところが黒くなり窪んだところが白が残ることが理解できない者もあり、凸版画の原理を考えながら制作を行っていた。また、図は反転し、左右が逆になることも上手く理解できておらず、文字はひっくり返して作っても並びを変えておらず、スペルがおかしくなってしまう、刷り上がってから気付く者もいた。さらにインクの付け加減も説明だけでは理解できず、ローラーにべったりインクを付け過ぎて、版の目を詰まらせる者もあり、想像力の欠如を感じてしまった。インクの付け加減は刷り上がりに大きく影響し、試し刷りの際は紙がインクを吸い取り薄く刷り上がるが、本刷りはインクが安定すること、バレンの扱いが均一でないと痕が残ってしまい上手く刷れないことなども学生らは体験した。この様に経験を通してしか気付けない感覚（さじ加減）と版画の原理を理解し、スチレン版画や画用紙で筆圧だけで刷れる簡単な版画などを知ることによって、子ども達の造形あそびに応用することができることを期待して取り組んだ。

本授業では、6週ほど版画に割り当て、1週目に版画の理解と紙版画の原画構想、2～3週目で制作、4週目に試し刷りとサインの入れ方説明、5週目に本刷り、6週目にスチレン版画を行い、手軽に取り組める版画の応用を体験した。

授業回	授業内容
1回目	ガイダンス：版画の理解 紙版画：原画構想
2回目	版制作
3回目	版制作
4回目	試し刷り
5回目	サインの入れ方、本刷り、サインを入れて完成
6回目	スチレン版画体験

版画の評価方法は以下の通りである。

〔1〕種類や手順（工程）の理解

版画の種類や作業の工程が理解できているか試験で評価する。

〔2〕制作方法や道具の理解

目標に近づけて作品ができているか、道具（糊付けやローラー、バレンなど）が正しく使えているかを評価する。

〔3〕造形物の工夫や配慮

子どもとの活動を想定し、明るく楽しい気持ちになるような図柄や模様、仕上がりの美しさ、余白の清潔さなどを評価する。

#### 2-4. 新聞テント

子どもの造形あそびと云って良いのだろうか、幼稚園の子どもが広告紙を端から丸め硬く巻き上げ棒状にしたものを「剣（けん）」と称して作り、友達と振り回して遊んでいた。チャンバラの様に剣をぶつけ合い、折れるとまた次々に、より硬く、より長いものを子どもながらに工夫し、夢中になって作っている姿が見られた。誰が始めたか分からないが、自発的に広まり、園児の間ではブームになっていた時期があった。この剣を作る要領で新聞紙とテープだけで作ることができ、入ってあそべる秘密基地のような新聞テントの制作に授業で取り組んだ。剣をつくることを思えば子ども達を中心となり、保育者のちょっとした援助でテントができてしまう。工夫次第では何十人も入ることもできる大型テントも作ることができるかもしれない。

授業の位置付けとしては2年生の前期中で、環境に広がるスケールの大きな作品制作を、1年次の基礎的な授業の応用として展開させることを期待した。また、身近な材料であり、実習の現場に出ても簡単に応用できる利点もその理由である。

学生らは、1年次の造形表現でユニットと云う考え方・見方を既に学習している。ユニットとは「単体では極めて単純な形である」「並べたり、立体的に組み上げていくことで無限の組み合わせのパターンや、形、広がりを経験することができる」<sup>6)</sup>技法の一つで、デザインや建築の中に多く使われている。新聞テントはこのユニットの技法で骨組みを組み上げていき、広げた新聞紙でホロを張り完成させる、極めて簡単なものである。

<材料>

新聞紙（約70枚／約朝刊一週間分）

セロハンテープ

ホッチキス

<作り方>

- ① 新聞紙を細く丸めて棒を作る。  
2枚で1本の棒を作る。固く巻くのがポイント。
- ② 3本の棒で三角形を作る。  
ホッチキスで端と端を留め、テープでしっかり補強。（これを10個）
- ③ 三角形8個、上下上下と繰り返してつなげる。
- ④ 最初の三角形と最後の三角形をつなぎ、輪っかの壁の骨ができる。
- ⑤ 屋根の梁に三角形を2つ取り付け、骨組みの完成
- ⑥ 入り口以外の骨組み全体を、新聞紙でおおう。下から張っていく。  
完成



図4 新聞テントにホロを張る

応用として、ユニットのパターンを増やせば大きさや形を変えることができ、ホロも絵の具やペン・色紙で装飾すれば創作活動がさらに広げられることもできる。目的や活用の仕方によって、飾り付けることで、より

一層興味を出すことが可能である。

本授業では、1グループ3名でのグループ活動とした。1グループ30本の棒作りに120分。三角形のユニット10セットと、骨組みを組み上げ、ホロを貼る作業に90分を要した。グループで要領の差があり、ぎりぎりまで掛かるグループもあれば、完成後テントの中に入って遊ぶグループとまちまちであった。

授業回	授業内容
1回目	ガイダンス：新聞テントの構造理解（ユニット） グループ分け、棒作り
2回目	棒作り、三角形（ユニット）組み合わせ
3回目	骨（ユニット）の組み上げ、ホロを張る 振り返り

新聞テントの評価方法は以下の通りである。

[1] 構造や工程の理解

ユニットを応用させ、構造物が制作できるか、作業の手順（工程）が理解できているかを評価する。

[2] 素材や道具の理解

素材である新聞紙の持つ性質を理解し、しっかり丈夫な棒を作ることができているか、ジョイント部分を丁寧に組み立てているか、基本の正三角形を同じ様にできているかを評価する。

[3] 造形物の工夫

子どもとの活動を想定し、丈夫にできているか、ユニットの工夫がされているかなどを評価する。

[4] 共同制作の配慮

グループでの取り組みであり、協力して制作に取り組むことができたかを評価する。

## 2-5. ポリ袋のバルーン制作

保育士は日々、身近な材料で容易に造形制作ができ、子ども達の創造性を豊かにし、興味・関心を惹く創作活動が求められており、さらに造形表現技術をもって環境づくりも取り組む必要がある。そう云った意味では、ポリ袋をセロハンテープでつなぎ合わせ空気の造形物をつくることは、簡単に安価に作ることができる、適した方法である。空気で膨らんだバルーンのぷよぷよした質感や空気が流れてふわふわと揺らぐ動きは、



図5 ポリ袋のバルーン

子ども達の興味や関心を惹く造形物である。後期の授業では期間中に学園祭もあり、授業での成果物を学園祭に活かせないかと云う思いもあった。残念ながらそれは実習で授業開始のスタートが遅れ、学生の空きコマと調整が取れず間に合わなかった。授業内では完成したものに空気を入れると、思った以上に大きく膨らみ、体積を持った巨大バルーンに学生は満足していた様子だった。

本授業では、最初にバルーンの構造を理解してもらうために、既成のポリ袋を1人1枚ずつ渡し、口をセロハンテープで塞ぎ、端にストローを取り付けたものを息で膨らましてもらった。しかし、45リットルのサイズを1人で膨らませるのは時間も掛かり大変なので、途中からコンプレッサーを出し、空気を詰めた後、ストローをテープで塞いだ。膨らむと学生らはすぐにポリ袋バレーを楽しんでいた。構造を理解したところで、4名ずつのグループ分けをし、どの様な形にするか構想を練ってもらった。2～3回目でバルーン制作。4回目に扇風機で空気を送り込み、ふわふわと不安定な巨大造形物の完成を見届けて、振り返りをした。

授業回	授業内容
1回目	ガイダンス：バルーンの構造理解 ポリ袋バルーン制作 グループ分け、巨大バルーン構想
2回目	巨大バルーン制作
3回目	巨大バルーン制作
4回目	空気を入れる。 振り返り

ポリ袋のバルーン制作の評価は以下の通りである。

#### [1] 素材や道具の理解

素材であるビニール袋を理解し、穴が空かない様に丁寧に扱ったか、空気が漏れない様に丁寧につなぎ目を塞いでいるかを評価する。

#### [2] 造形物の工夫

子どもの反応を想定し、興味を惹く形ができていたか、立体の形の工夫がされているかなどを評価する。

#### [3] 共同制作の配慮

グループでの取り組みであり、協力して制作に興味を持って取り組むことができたかを評価する。

### 3. 学修意欲の低い取組み例および今後の課題

#### 3-1. さまざまな絵画表現技法

絵画表現技法は一つの技法に複数の例を取り組んでいるものが多く、例えばローリングという技法と言っても、①絵の具に浸したビー玉を、トレーに敷いた用紙の上に置き、傾けることでビー玉が転がり、転がった痕跡が色の線となって描かれるといった方法、②ラップの芯の様な円柱形のものに絵の具を浸した凧紐を螺旋に巻きつけ、用紙の上で転がし描く方法、③絵画用ローラーを段ボールの断面など硬い凸凹に押し付け、ローラーに跡を付けたものに絵の具を付け、用紙の上で転がす方法など、3種類の方法を行っている。従って全ての表現を行うと、28種類もの技法制作に取り組んでいることになり、混乱している学生は何名かいた。これまでも、技法の説明を手書きからプリントの説明文を切り貼る方法に変えたり、整理の時間を設けたり、混乱させない様に改善してきた。それでも数は減ったもののまだ技法名を間違ったりする者も数名おり、混乱している学生の姿が見られた。他に目立った問題点として、取り組んだ課題を全てやり終えてない、不完全の者が1割程度いた。また、人数は少ないものの、糊付けが雑で汚く、バランスが悪い状態のまま貼っても気にならない者も見られた。

今後の課題として、技法ポートフォリオの完成度を高めることに目標を置くのであれば、混乱を減らすべく、整理をする時間をもっと増やし、貼り方を丁寧に説明し、遅れている者は補講を課し、ポートフォリオ作りを徹底することが考えられる。しかし、アクティブラーニングの取り組みや子どもと関わることを想定し

た技術の修得が求められている現在、技法だけを並べて紹介する現在の方法は学生の質を考えても限界である様に感じる。

今後の課題は以下の通りである。

① 子どもを想定した技法

子どもとの関わりを想定したなかでの技法の取り組みを中心とした課題の改善に切り替えていくことが、モチベーションの低い学生に取ってもより身近に興味を持った学びにつながっていくのではないか。

② 量的な課題

量的な課題をどの様に解決していくかは課題である。版画に関係した技法は、造形表現Ⅱの版画と一緒に学ぶことで、Ⅰでの取り組みの数を減らすなどで、可能性を探る。

### 3-2. 陶芸と版画

根気強さを身に付け、作品を作り上げる粘り強さを養って欲しいと願ってのじっくり作る陶芸制作や版画制作の課題であったが、それぞれの課題をこなす事が学生の目標になっており、子ども達との関わりを想定した造形指導力獲得に繋がっているのか疑問に思うところである。

モチベーションの低い学生は、例えば陶芸に於いて成型の仕方や素材の性質による配慮を無視し、創作に興味を注ぐこともなく工夫やこだわりも見せず、作っておけば良いのだろうと言わんばかりのものを提出する者もいる。版画に於いても、版に、インクを付けたのは良いが周りを汚した新聞紙の上に奉書紙を置き、バレンで擦り余白は汚れたままで、作品に思い入れもないまま提出する者もいた。

このような学生を見ると、学生自身が楽しみ、作りながら粘土造形や版画の魅力を気づき、材料や技法の特性を自ら知りたくなり、扱える能力を身に付けたいと思ひ、子ども達の造形あそびに展開したくなる様な授業展開の検討が必要と感じざるを得ない。

今後の課題としては、以下のことが考えられる。

① あそびながら学ぶ

子どもを想定した粘土あそびや版画あそびを取り入れながら、素材の特性や扱い方を理解させる授業を探ることが必要である。

② 版画の取り組み

版画に於いては、子どもが取り組める版画あそびを想定し、例えば野菜スタンプやローラーあそ

び、あるいはスチレン版画でオリジナルスタンプ作りでも良いかもしれない。それらで学生ら自身が遊びながら、例えば絵の具を版画インクの代用に使い、どの程度の水加減で溶けば野菜の断面が良く写るか、でんぷん糊は加えたほうが良いか、絵画用ローラーではどうか、スチレン版画ではどうか、絵の具を使った版画インクの研究を課題にするなど、改善の余地はあると思われる。

### 3-3. 新聞テント

保育者は環境を設定していくことが求められていくという意味では、新聞テントは空間・大きさに慣れることにつながる。また、「剣」は性差的な要因から男子のあそびであるが、新聞テントは「家」という言葉掛けをすれば女の子の興味も惹くことができる造形あそびとして広がりを持たすことが可能である。

造形表現Ⅰ・Ⅱでは卓上での作業サイズの作品しかやっておらず、床に置きで制作するスケールの制作は初めてになる。その点では学生にとって新鮮な取り組みであり、手軽な材料で簡単な作業で子どもと一緒に制作できるこの課題は、どの学生も興味を持って取り組む様子が伺えた。また、ユニットの原理を理解した学生は、応用させて活動中、2グループを合体させ2倍に広げたテントを作るグループもあった。

その反面、子どもでも作ることでできる新聞紙の棒ではあるが、学生のなかには硬く新聞紙を巻くことができない者もいた。結果、弱い骨組みになり、屋根を支える力に耐えることができず、崩れかかったテントになってしまうグループもあった。また、1つのテントを作るのに、30本の棒を作らなければならず、地道な工程に飽きてしまい、熱が入らず、時間内に完成させることができなかつたグループもあった。

今後の課題としては、以下のことが考えられる。

① 利用機会の創出

今回、作っただけで終わってしまい、授業後は取り壊すしかなかった。何かしらのイベントに合わせてお披露目、或いは活用する場を併せて設定する必要があると感じた。成果物の中の一部だけは学生支援課の了解を得て学生談話室にしばらく置かせてもらった様だ。これは学生自身が支援課長に話を持ち掛け、了解を得たとのこと、アクティブ・ラーニング、能動的に学修できた成果の表れではないだろうか。

### 3-4. ポリ袋のバルーン制作

今回初めて実験的に取り組んだ課題のため、ガイダンスの際、現実的なイメージを示すことができなかつたことが理由と思われるが、バルーンの構造の理解として最初に取り組んだポリ袋バルーンは楽しみながら取り組んでいた。しかし、最後に空気を入れて膨らんだ際は表情が変わったものの、実際の巨大バルーン制作の際は、楽しそうな表情はあまり見られなかつた。どこに向かって制作すれば良いのか、どの様に展開していけば良いのかがイメージが掴めなかつたことが原因と思われる。また、制作に取り組んだ時期に、欠席する者もあり、人任せになったグループもあった。協働という意味では、スケールの大きな体験ができることはグループワークの利点である。4人のグループでリーダー的な役割と丁寧な作業を得意とする者が指示を受けながら作る者と、手は余り動かさないが明るい雰囲気を作り作業を応援する者など、自然に役割ができている様子も伺えた。

今後の課題としては、以下のことが考えられる。

- ① イメージを湧かせる授業説明の必要性  
次回からは今回の取り組みを例に見せることが出来るが、作ってみたいと思える様な例を示す。
- ② スケジュールの調整  
学園祭などのイベントに合わせて完成時期、或いは成果物の展示・利用の機会を授業計画に組み込む。
- ③ 評価の問題  
グループワークならではのスケールの大きな体験ができるのは良いが、各個人の評価をどうするか、評価基準の設定を検討する。

## 4. まとめ

授業を振り返り、見えてきたことは、これまで枠に嵌り改善と言ってもわずかな変更しかして来なかつた実態が見えてきた。限られた授業数の中で教えられることは限りがあるが、学生自らが学ぶことに興味を向けることが出来たなら、無限の学びにつながることに気付くことができた。そう言った意味では、この一考察は大きな気付きとなった。今後、この気付きを実際の授業に反映させ、モチベーションの低い学生が、子どもとの関わりを容易に想定でき、学生自身が楽しみながら造形に取り組める、延いては知りたいと思える様なプログラム作りに取り組まなければなら

い。これらの工夫は、子ども達にとっても学生にとっても教員にとっても益になっていくはずである。それらに気付き、改善しなければならぬと志を立てられたことは考察の意義があったと言ってよいだろう。

しかしながら、「本来授業やカリキュラムの評価は、それらが目指す目的や目標に対してどのような効果があったかという観点でなされるべきであろう」<sup>7)</sup>と言われる様に、授業体験のみでの考察は不十分であったことは事実である。学生らが楽しさを実感し能動的に学ぶようになったときに初めて成果として捉えられるのであり、絵に描いた餅にならぬ様、実践していかなければならない。そのためにもの、根拠となる意識調査などのデータを収集していくことから始めなければならない。それを最初の課題にしたい。

## 参考文献

- 1) 内閣府：18歳人口と高等教育機関への進学率等の推移，文部科学省作成資料を基に，2014.
- 2) 葉山正行：造形の表現手法に関する一考察—技法あそび教材におけるある種の類似性について—，大阪キリスト教短期大学紀要，2015.
- 3) 花篤實岡田愨吾編：新造形表現実技編，pp.18-29，三晃書房，2009.
- 4) 山本斉：保育表現技術としての図画工作についての一考察—実践的な技術の必要性をめぐって—，松山東雲短期大学研究論集 vol.45，pp.113-124，2015.
- 5) 花篤實岡田愨吾編：新造形表現理論・実践編，p.123，三晃書房，2009.
- 6) 花篤實岡田愨吾編：新造形表現実技編，p.30，三晃書房，2009.
- 7) 伊達由実村田夕紀原祐子：新設科目「保育内容・表現（総合）」における学びと課題，p.438，四天王寺大学紀要第56号，2013.